

研究発表会のOR

森村 英典

研究発表会についてのOR作業

「イベントのOR」という特集を考慮しておられた柳井編集委員長に筆者がたまたまお会いしたさい、「OR学会にとっての最大のイベントは研究発表会であるから、これを材料にしたORの記事がほしい。ついては、今度の研究発表会はお宅が引き受けているのだから、しかるべきOR作業を行なっておき、その結果と実績とを比較して面白い記事に仕立てるように。」との御下命をいただきました。

たしかにお説ごもともと、総論では賛成せざるを得ないのであるが、そのときには、すでに実行委員会も発足して、OR作業などと、ことさらに意識もしないまま、準備にとりかかっていたので、筆者はあいまいな態度でこのお話を承っていた。しかしながら、紺屋の白袴と言われなためにも、というよりも、とにかく楽しんでOR作業をしておくのも悪くはないな、と考えたのも事実である。

それで、実行委員会の次の会合のさい、この話を披露したが、細部にわたる実行計画をすでに立てている実行部隊の面々からは軽くあしらわれてしまった。コスト・パフォーマンスの点から見れ

ば、ことさらOR作業などをする必要はもともとなさそうであることはほとんど明らかであろう。教室の容量は通常の研究発表には十分であるし、参加者数の予測は財政的には重大問題であるはずだが、極端な赤字を出さないかぎり、あまり責任を感じずの必要もないらしい。とすれば、「学問的興味の対象として、つまり、格好の演習問題として」とりあげるものでなければ、少なくとも今回の研究発表会に対しては、OR作業に人間と労力を使わないほうが、OR的に見て正解であろう。ましてや、「今は忙しい。目前に迫った研究発表会を無事に終わらせるためには、細々とした雑用をやらなければならない。学問的興味の対象としてならば、直接の雑用を引き受けていない委員長あたりでやってくれ。」実行委員の皆さんは紳士ぞろいなので、そんなことは露ほども口にはされなかったけれども、お腹の中は多分こんなところではなかったろうか。

となれば、1人でシコシコとOR作業を進めるだけの時間も労力も使えない無能な委員長としては、この件は忘れてしまわざるを得ず、したがって柳井編集委員長には「書きます」というお返事はしないまま数カ月を過ぎてしまっていた。

突然本誌編集委員のおひとりから原稿用紙を渡されて、「他の原稿は今月一杯が締め切りですが、研究発表会の終了後1週間ぐらいいは待ちますから、お約束の記事を書いてください」と言われたときは、正直のところ動願してしまったけれども、

もりむら ひでのり 東京工業大学 理学部情報科学科
〒152 目黒区大岡山2-12-1

はっきりお断りした覚えもないので、これは致しかたないと改めてお引き受けした次第である。

お引き受けはしたものの、本来の構想にもとづく材料がもともとないのであるから、本稿は特集にふさわしい記事になりえない。しかし、ちゃんとしたOR作業は次の研究発表会をお引き受けいただく方をお願いするとして、ここでは研究発表会開催準備に当ってわれわれなりに考えたことをご披露して、いささかなりともご参考に供するのがすじであろうと考えた。羊頭狗肉の標題であることをはじめからお断りして、読者諸賢のご有怨をお願いしておかなければならない。

会場選定のOR

研究発表会にご出席いただいた会員の皆様には、特別講演を大きな講堂で聞いていただいたので、「聴衆の割にあれは大きすぎた」という印象をお持ちの方もおありかと思う。しかし、講堂の使用を思いついた裏には少々ORじみたお話もあるので、そのご披露から始めたいと思う。

特別講演の聴衆を約250人と見積ると、A会場として使用した教室ではいかにも狭すぎる。びっしり詰め込んで254人の収容が可能という部屋では荷物も置けなくて、多くの方々にご不便をおかけしてしまうであろう。11年半前に本学で研究発表会を開催したときは、まだあの教室でもなんとか事足りたが、この間に参加者は着実に増えているのである。近くの建物に396名収容という教室があるので、はじめはそこを特別講演の会場に予定していた。

もう1つ、会場に関して難問があった。それはペーパー・フェアに具合のよい部屋がなかなか見つからなかったのである。私どもの大学では、教室の机と椅子はすべて作りつけになっているため、ペーパー・フェアのように、ブラウジングをしながら聞きたい発表を搜すというスタイルの使い方にはまったく不向きなのである。会議室ならばよいが、頃合いの大会議室は研究発表会の主催

場付近には存在していない。

そこで、最初は396名収容の教室の窓や壁をバックにして発表をお願いし、聴衆は通路に立って聞いていただくというかなり居心地の悪いスタイルで我慢していただこうかと考えていた。しかし、どうにもその具合の悪さに逡巡していたので、どこかにペーパー・フェアのできる所はないかということが、いつも頭の隅にひっかかっていた。そのためか、ある日ふと講堂のロビーのスペースを思いついた。そこでさっそく、実地検分を行なって、何とかペーパー・フェアに使えるという感触をえた。しかし、そのためにだけ講堂を借りるというのではもったいない。

ついでなのでご披露しておく、国立大学の施設を学会などが借りるには、その面積に応じた借り賃を国庫に収めなければならないうえ、その額も馬鹿にならないのである。当然、講堂の借料は高い。それゆえ、効率的な活用を考えるならば、特別講演すべてとペーパー・フェアの抱合せということになる。従来、特別講演は両日とも昼休みの前後に配置されていたが、今回は4つの招待発表が別に企画されていることでもあり、特別講演2つをいちどに行なっても特に不都合はなさそうだと判断した。こうなれば、懇親会場との距離も考慮して、第1日の午後に、会長の会務報告等と特別講演、それにペーパー・フェアを講堂で実施という線が、ほとんどユニークな解になった。

午前の研究発表会終了後、大部分の参加者はキャンパス外で昼食をとられるであろう。その方々が“遠い”発表会場にもどらずに“途中の”講堂に到着し、終了後は近くの懇親会場にそのまま流れるという“動線”は決して悪いものではあるまい。会場費の面でも余分な支出のほとんどないこの方式は、従来の慣習を少々破ったとしても、それに十分値するだろう。

ところで、このシナリオを実現するとなると、懇親会を5時開始と設定しても、1時半過ぎに特別講演等の開始という線が出てくる。そうすると

午前中は12時半まで研究発表会が行なわれるのが適当で、その結果昼食が1時近くになるが、それは付近の食堂の混雑状況から見てもむしろ望ましい。懇親会は2次会を都心でやっていただくための準備的会合と考えれば、5時に始めて軽くすませるのも具合がよいと考えられる。午前中に2セッションの発表を行なっても、10時に始めればよい。東京という都市のただっ広さを考えても、この時刻ならほとんどラッシュに遭わないで参加していただけるであろう。そして、正直なところ、この点は実行委員にとっては非常に大きなメリットになる。このように考えると、プログラム構成の上からも利点のみが目につく、という判断が下され、これには実行委員全員の意見が一致したと知っている。

以上が、会場の候補というハード面の制約をふまえたうえで、オペレーションというソフト面の最適化を図ったつむりの“OR的な”お話しである。今まで各地の研究発表会に参加させていただきながら、会場やプログラムの構成にはあまり注意していなかったけれども、裏方には裏方の苦勞がどこでも沢山おありであったろう、と改めて思い知らされた。

ベル押しのOR

研究発表会場ではベル押しがつきものである。アルバイトの1人にベルをもたせて、各講演ごとに3回ずつベルを鳴らす。これはもうすっかり定着してしまった風景である。

ところで、この9月に京都の国立国際会議場を舞台に開かれたテトラヒック会議では、講演開始とともに vice chairperson の押すボタンに連動して、time up の5分前には青ランプが、ちょうどには赤ランプが講演者の立っている演壇上で点灯するようになっていた。この会議にはOR学会員も多数参加したが、その中のおひとりが「大きな文字で残り時間を表示し、時間がきたら音を出すようなデジタル時計は無いものか。それをい

くつか学会で買っておけば、毎回の発表会で時計掛のアルバイトを置かなくてすむから、経費節減になるだろう」とのご意見を寄せられた。筆者もなるほどと思ったので、少し探してみた。注文どおりのではなくて、それに近いのが料理用などを考えて作られたタイマーであった。これは、残り時間を比較的大きな字で表示し、time up のとき、ピーピーとかなり大きな音を出す。しかし、講演者が少し離れた所で見ても目につくほど字は大きくない。それに、音を出すのは1回かぎりである。

ところで、講演者は通常OHPなどに神経を集中しているから、ときおり時計を覗けという注文は酷である。人間のベル押しは3回鳴らしてくれるのもメリットの1つであるが、突発的なトラブルにも対処してくれる点は何よりもたのもしい。時計掛の代用にするならば、せめて講演の始めと終りにボタンを押すだけで、3回ブザーを鳴らしてくれる程度のものでなければなるまい。その場合、残り時間の表示はさほど大きな字でなくてもよいであろう。スタートボタンを押せば後は自然に鳴り出すならば、座長の手もとに置けばよいからである。

研究発表会の前日には恒例によってシンポジウムが催された。筆者も司会を勤めたので、前述の1回しか鳴らないタイマーを実験してみた。シンポジウムのように1つの講演の時間が長く、しかもあまり厳密な時間で進行管理をしなくてもよい場合には十分その役割を果たすと思われた。司会者(=座長)は時計を見ずに、ひたすら講演を聞いていけばよいという安心感はかなり評価してよいようである。

研究発表会では、すでにアルバイトの手配もしてあったし、3回音を出すタイマーもなかったので従来どおりのベル押しが行なわれた。会の終るころ、ある委員が「ベル押しを学生にやらせたのは正解でした。彼らはベル押しのような役を与えられたことをキッカケとして学会の雰囲気を知

り、学会に親しみを感ずるようになる。この教育効果は抜群だから、変な合理化でそのチャンスを奪わなくてよかったですと思います」と言っていた。

これももったもな話である。遠い昔に自分が学会に関係した初めての機会はやはりベル押しであったことを思い出し、同時にOR作業の陥りやすい落とし穴を垣間見た思いがした。しかし、3回音を出すタイマーは在るのに越したことはない。学生が学会に出ていることは歓迎だが、時計をほとんど気にしないで講演を聞いていられるのはもっと歓迎すべきことであろう。そのためには、プログラマブル電卓のような計算機の類を使えばよい

はずである。ただ、この音は一般に小さいから、どこかのメーカーで、プログラマブル・タイマーを作ってくれないかと思っている。

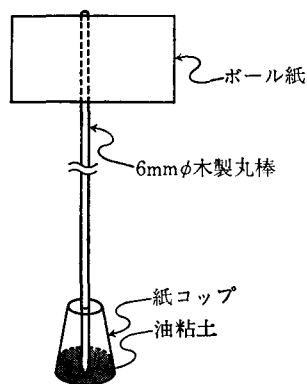
何はともあれ、研究発表会は終わった。幸い、事故もなく、運営上のお叱りも頂戴しないですんだ。OR作業はしなかったけれども、懇親会も含め、参加者数の予測は過去のトレンドを見れば大体のところは押さえられるようである。これは、もともと閉じた集団を対象にしたイベントであるためであろう。参加者数で見るとかぎり、OR学会は地道に、かつ着実に発展していると言えそうに思う。

受付にて

大会会場に到着して、まっさきに立寄るのが受付である。「正会員」「学生会員」「賛助会員」「懇親会」……と受付は分れていて、それぞれの机の前には札がさがっているのだが、人ばかりで見えない。こんなとき、札が人の背より高いところであればと思う。天井から紐で吊すのもよい。会場が結婚披露宴もするような洒落た場所なら、テーブルに立てて「鶴」とか「亀」とか席を示す台があるから借りておけばよい。

しかし、会場が大学等ではそんな気のきいたものがあるはずもない。こんなときには、紙コップ、油粘土、太さ6mm、長さ80cmぐらいの丸棒、それにボール紙（レポート用紙等の台についているものでよい）があれば、なんとか即席のカンバンがつくれる。

コップの口の部分に油粘土をつめる。口から深さ2cmぐらいで充分で、あとは空洞のままにしてお



く。これを逆さにして、机の上におしつけばびったりとはりつく。丸棒の一方にはボール紙のカンバンを接着剤（ボンド等）ではりつける。他の一方をエンピツけずりでとがらせて、これをコップの底を通して粘土につきさす。これで出来上りである。材料は文具店、模型店、スーパーマーケットで安価に手に入れることができる。安物の割には見ばえも具合もよい。
(からくり堂主人)